

# ひなた通信

## ～夏秋栽培前期編 定植から収穫前まで～

この度は、当社大玉トマト「ひなた」をご利用ご愛顧頂き誠にありがとうございます。  
本誌では、「ひなた」を栽培する皆様にとって役立つ情報を栽培前期と後期に分けてお伝えいたします。

前期編では、育苗・定植から収穫前までの栽培時のポイントを中心にご紹介致します。



### 「ひなた」の特長

#### ✓ 着果が良く早生で収量性が高い

花数は6～8花と安定していて着果が良く、開花・肥大・着色が早く多収となる

#### ✓ 果形・果揃いが極めて良く障害果の発生が少ない

約200～220g前後の豊円腰高で、裂果・空洞果・奇形果などが極めて少ない

#### ✓ 食味と硬さの両立

果実が硬く輸送性や店もちに優れ、食味食感もとても評価が高い



# 栽培前期の管理のポイント

## 【元肥と定植】

- ✓ 土壌条件や前作の残肥によって異なりますが、標準的な元肥の施肥量は各成分で10aあたりN（窒素）12～13kg、P（リン酸）15～20kg、K（カリ）15～20kgを目安とします。
- ✓ 「ひなた」は極早生で草勢がややおとなしい品種なので、極端な老化苗の定植は避けましょう。**やや若苗のステージの定植が好ましく、1段花房の第1花が2部咲きの頃が理想的**です。
- ✓ セル苗定植の場合には、元肥を減肥して初期の草勢が旺盛になりすぎないように注意しましょう。

## 【灌水と追肥】

- ✓ 定植直後は速やかに活着させるために適宜灌水を行います。
- ✓ 苗が活着した後は灌水量を抑えて根を深く伸長させます。3段花房の開花前までは着果負担がかからないため、灌水を多く与えたり追肥を行ったりすると草勢が旺盛になりすぎてしまいます。これが異常茎（めがね）や芯止りの発生や花の乱れの原因となります。**初期の灌水は極力抑え、根を深く張らせることで根域を十分に確保**しましょう。
- ✓ 「ひなた」は極早生品種のため、1段果房の果実の肥大が通常の品種より早めに始まります。そのため**2段花房が5分咲きの頃を目安に早めに追肥を開始**します。
- ✓ 追肥量は各成分で10aあたりN（窒素）1.0～1.5kg、P（リン酸）2.0kg、K（カリ）2.0kgを目安におよそ10日間隔でこまめに施用しましょう。
- ✓ 着果負担が増えるに従いK（カリ）要求量も高くなります。「ひなた」は特に**着果が良く果実の肥大も早く進むため**、他の品種よりK（カリ）を多く必要とします。**K（カリ）の追肥は着果負担に合わせてタイミングを逃さず多めに施用**しましょう。

## 【草勢管理】

ひなたの栽培は安定した草勢を維持することが最も肝心です。そのためには草勢に合わせた着果負担とこまめな追肥が重要です。

- ✓ 低段果房は、**1～3段をそれぞれ3果・3果・4果に摘果**します。
- ✓ 「ひなた」は肥大性があり且つ草勢がややおとなしい品種なので、低段に着果させすぎると草勢が急激におとなしくなります。**低段には着果させ過ぎないように**注意しましょう。4段以降は樹勢を見ながら3～4果に適度に摘果を行います。

✓ 草勢の判断...以下のような点を観察して判断します。

① 成長点付近の葉が上に向いて立っている場合は草勢が弱く、ごわごわして下に向かって巻く場合は草勢が強いと判断されます。



草勢が弱い



良好な草勢



草勢が強い

② 生長点が一番近い開花花房（2-3分咲き）の2~3cm下の茎径を観察することで、草勢を診断することができます。



診断の目安:(開花花房の2~3cm下の茎径)

- ◇ 栽培初期~中期の茎径は 0.9~1.0cm くらいが適正
- ◇ 茎径が0.7cmより細ければ草勢が弱すぎる
- ◇ 1.5cmを超えるようであれば草勢が強くなりすぎている

**草勢が弱い場合 ⇒ 着果や果実肥大が悪く品質も低下する**

- ① 下葉の摘葉を控えて、誘引もあまり強制しない
- ② 果房直下の側枝の第一葉を残して摘芯し葉枚数を増やす
- ③ 摘果のタイミングを早める、さらに果房当りの着果数を2~3果に制限して着果負担を軽減する

**草勢が強い場合 ⇒ 奇形果や着色不良による品質低下や裂果が起こる**

- ① 灌水やN（窒素）の追肥を控えて、P（リン酸）・K（カリ）の葉面散布する（亜リン酸系の肥料が好ましい）
- ② 下葉欠きをやや多めに行う（草勢に応じて3~5枚摘葉）
- ③ 果房直下の側枝を30-40cmほど伸ばしてから晴天時に強剪定する

## 毎年このようなことはありませんか？

初期草勢が非常に強かったため摘果せずに着果させたら、中段(5 段前後)より急激に草勢が弱くなり着果不良となり後期まで草勢が回復しなかった。

草勢が強くても低段着果ステージ(1～3段)ではまだ十分な成木にはなっていません。この段階で着果負担をかけすぎてしまうと中段以降の草勢が弱くなってしまいます。**低段は摘果を行い着果数を制限して安定した草勢の維持**に努めましょう。

## 【病害防除】

梅雨期は日照不足と多湿によるダメージを最も受けやすい季節のため細心の注意をはらう必要があります。

- ✓ 梅雨期はジメジメが続き、疫病・灰色かび病・葉かび病が最も発生しやすい季節です。「ひなた」は葉かび病には耐病性を持っていますが、症状が類似するすすかび病に対しては耐病性を持っていません。いずれの病害も**早めの予防が大切ですので定期的に防除し**草勢維持と収量確保に努めましょう。



茎に発生した疫病



大量に廃棄された灰色かび病の果実



みかど協和株式会社